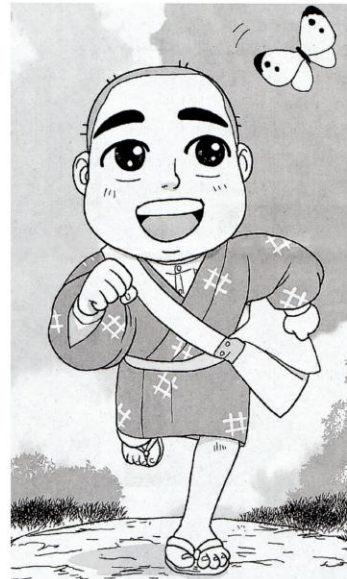


諦めず、未来へ走る— メッセージ

カ
ナ
ナ
ク
リ
カ
ナ
ナ
ク
リ
カ
ナ
ナ
ク
リ

日本初の五輪選手 金栗四三物語

15日に最終回を迎えた漫画「KANAKURI」。4月の連載スタートから37話にわたって、熊本が生んだ日本初のオリンピック選手、金栗四三の生涯を追った。作画を手掛けた岩田紘典さん・崇城大芸術学部マンガ表現コース非常勤講師のインタビューと、構成の橋本博さん・熊本マンガミュージアムプロジェクト代表の寄稿から作品を振り返った。



少年時代の金栗四三

漫画「KANAKURI」の連載を終えた岩田紘典さん。連載を通じて「あきらめずに挑戦し続けることの大切さを描きたかった」という＝熊本市東区

岩田紘典さんインタビュー

この漫画を通して伝えたいかったのは、みんなに愛された金栗さんの人間性とともに、何度くじけても諦めずに挑戦し続ける姿勢こそが大切、という金栗さんが生涯をかけて体現してきたメッセージでした。

国内予選で当時のマノン・世界記録を打ち立てた金栗さんは、初めて出場したストックホルム五輪では優勝を期待されていたはず。ところがまさかのリタイアに終わり、その後2度の五輪でも思うような成績は残せませんでした。

それでも金栗さんは人生を通して走り続け、陸上競技の振興や女子の体育教育にも力を入れました。漫画では、どうして金栗さんがそうした活動に力を入れたのか、そのきっかけをつくる役割を、登場する脇役たちに持たせたい、と考えました。

立花ひとみは、日本人女性として初めて五輪でメダルを獲得した陸上選手、人見絹枝をモデルにした架空の人物です。金栗さんの少年時代を



立花ひとみ

ドラマチックに描くことで、登場させようと考えていたライバルを、思い切って女性にしてみました。ひとみは金栗少年に走る楽しさを教え、競い合ひながら成長します。24歳の若さでなくなった人見絹枝のようになり、ひとみは早くにこの世を去

ることになりましたが、金栗少年はその後もその姿を生涯にわたって追求めました。

後半に登場するライバルの伊達喜代道は、金栗さんとは正反対の破天荒なキャラクターとして作り出した。当初は反目しながらも、次第に金栗さんの諦めない生き方に共感していきます。

関東大震災の罹災期に、喜代道は暴漢から見守る子どもを守るために足を切断する大けがを負った



伊達喜代道

しまします。しかし、金栗さんが見守る大会に出場した彼は、足を失ってもなお、最後まで走り切ろうという執念をみせた。障害があっても競技や人生を投げ出さない、パラスポーツの素晴らしさを描きたいと思いました。

旧制第五高等学校（現・熊本大）の校長を務めた熊納治五郎が、金栗さんに与えた影響の大きさは皆さんも存じの通り「黎明の鐘となれ」と金栗さんを鼓舞し続けた治五郎とは、師弟関係を越えた固い絆で結ばれていたことでしょうか。

漫画のラストでは、作中で何度くじけても努力と挑戦を続けた金栗さんに、2つの褒美を用意しました。一つは36話で、追い求めたひとみの面影を強く感じさせる生徒との出会い。そしてもう一つは、と



熊納治五郎

聞き手・松本敦



もにストックホルム五輪マノン・競技を戦った仲間たちとの再会です。私にとって初めての連載となった金栗さんへ、感謝の気持ちも込めました。

ラストシーンでは、熊本地震からの再建が進む熊本城を背景に、熊本城マラソンに参加するランナーたちを描きました。地震で大切な人を亡くした、けがを負ったりした人も多いと思います。それでも人は生きていかなければならない。未来へ向かって走り出す大切さを、この漫画を通じて皆さんに少しでも感じていただけたらうれしいです。

熊本マンガミュージアムプロジェクト代表 橋本博

地域への誇り 漫画の力で

寄稿



これまでにさまざまな自治体の依頼で、地域の歴史や文化を紹介する漫画の原案を作ってきた。どこにでも誇るべき歴史や文化がある。たが時代の中で忘れ去られてしまっている人も知らないことが多い。そこに光を当て、もう一度、地域への誇りを漫画の力で取り戻してもらいたいと思っている。

2014年に合志市教委からの依頼で「カタルバの樹」合志義塾ものがたり」を作った。それまで地元で義塾を知る人はほとんどいなかった。漫画が地元小学校の郷土教育に使われるようになって埋もれていた至宝が当たった。15年に熊出版文化賞を受賞。17年に地元テレビ局がドラマを制作した。

18年4月には天草市の依頼で「石をつぐもの」天草の下浦口ものがたり」を作った。長崎の出島や大浦天主堂などの建造に、天草の石工や職人たちが深く関わっていたことが描かれた。作画的に担当したのは岩田紘典さん・崇城大の学生たち「KANAKURI」には自信がある。単行本を企画チームだ。

読者から一番反応があったのは立花ひとみだろう。岩田さんと学生とのシナリオ練りから生まれたキャラクターだ。面白い漫画は史

実をなぞるだけではだめで「ラブ」と「ライバル」が不可欠。金栗を走らせる、に目覚めさせるために、ひとみを登場させた。

モデルとなった人見絹枝は、女子がスポーツ競技に参加することを白い目で見られる時代を生きた。そのつらい気持ちをひとみに代弁させた。金栗が後に女子スポーツ・競技の振興に人生を捧げた理由もひとみに託した。

少年期の金栗は坊主頭でギャグ漫画のキャラクターに見える。金栗のイメージは、スポーツ界の重鎮ながら、親しみやすい好々爺でもそれだけでは漫画として成立しない。未熟な少年が試練を経て成長する物語には読者が愛される「かわいさ」「弱さ」「面白さ」が必要だった。

漫画が単行本となった。金栗がなぜ走るのかを好きになったか、地元の和歌山・南関町、玉名市の人や自然が彼を育んだか、彼にとってオリンピックとは、なぜ金栗はなぜスポーツ振興に取り組んだのか。考えながら読んで思わぬ発見があると思える。

NHKの大河ドラマ「いだてん」が始まるが、取材力、脚本キャスティング、制作費のたれをとってもかわらない。たれと元への愛の深さ、漫画としての面白さ、魅力的なキャラクターには自信がある。単行本を読んでおくと、ドラマもいっそう楽しむことができると。いまだんには、ひとみも伊達も出てこない。ネタバレにはならないので安心を。



●応援の声、多数
漫画「KANAKURI」の連載終了までに、読者の方々から数多くの反響をいただきました。一部を紹介いたします。＝写真は寄せられた手紙
「この漫画を読むことでますます来年の大河ドラマが楽しみになりました」「新聞の1ページを丸々使ったの漫画は画期的な決断だったと思う」「金栗さんの子どもの時もかわいかったけど、大人の彼もすく面白」「こんなにも面白くてすごい人が熊本にいたんだ、と驚いた」「登場人物の表情（感情）が場面、場面でアップでリアルに表現されている点がインパクトがある」
応援ありがとうございます。



SHIRO KANAKURI